

2 ヘンギストとメイのバラッド

昔々 アーサー王時代のこと
サー・エルマーと肩を並べる騎士はいなかった
彼ほどにご婦人方を虜にする若き騎士は
国中探してもいなかった

妹のメイも 国中の娘たちの中で 5
一番の器量よし
アーサー王の宮廷の騎士の皆を虜にした
だが 誰にも叶わぬ恋だった

どれほど愛しても どれほど真心を誓っても
メイの心は掴めなかった 10
だが ある日夕べの祈りの時に
メイは恋に落ちてしまった

尼僧院長はすぐさま悟り
メイに事の次第を打ち明けるよう促した
「その優しい若者のお名前を教えてちょうだい 15
その方にあなたの想いを伝えてあげましょう」

長々とした説得に疲れきって 美しいメイは答えた
「その方のお名前を知る由もありません
天の園から降り立った天使に
心を奪われてしまったのです 20

たった一度だけ ああ それだけ
愛しいお姿を見たのです
ある日の夕べ 緑の森のかたわらの
せせらぎ響く岸辺でのことでした

この上なく優雅に輝いていた

その方の瞳こそ わたしへの愛の告白 25
その方の宮廷人の物腰と紫の胴衣こそ
王子の血筋を語るもの

その方はわたしの兄の角笛を聞くと
急いで船へと戻られました 30
けれどその方は その優雅なお姿で
いまだにわたしの夢枕に立たれます

ある時には 輝く鎧を身に付けて
戦いの槍を振りかざし
またある時には 宮廷人の出で立ちで 35
陽気なダンスを踊られます

髪はカラスの濡れ羽色
肌はクリスマスの雪のよう
頬は朝焼けの色よりもっと赤く
唇はバラの蕾^{つぼみ}のように輝いています 40

脚も腕も そのお姿すべてが
自然という匠^{たくみ}の最高の技で創られたもの
輝く瞳が告げるのは
その方こそ 愛と戦いの申し子」

長い長い間 望みない恋に焦がれて 45
美しいメイは嘆いた
やがて 花香る春が巡り
夏が木々の緑を深める頃

美しいハンバー川の岸边一面に
サクソンの軍旗が翻り 50
サー・エルマーの城門へ向かう
槍部隊が見えた

メイが見渡した時 美しい朝焼けに
城壁はきらきら輝いていた

見よ サクソンの若い兵士らは 55
草地で戦いの準備に余念なかった

そこにいたのは ヘンギストことオフアの長男
磨き上げた槍を携えていた
彼の周りを 鎧をまとった若い兵士らを取り囲み
その凛々しい眼差しに従っていた 60

髪はカラスの濡れ羽色
肩から下へなびいていた
頬は朝焼けの色よりもっと赤く
唇はバラの蕾のように輝いていた

すぐさま ヘンギストは鋭い眼差しで 65
愛らしいメイの姿を捉えた
部隊に退却の指示を出し
恋に落ちて 深いため息をついている

「ああ 和平となろうと 戦となろうと
あなたのために海を越えやってきました 70
ああ あなたの胸に掛かる十字架にかけて
恋するこの苦しみを癒してください

あなたのためなら 父の後継ぐ玉座も捨てましょう
あなたとなら 荒野を彷徨いもしましょう 75
あなたとなら ブリテンの王冠も受け継ぎましょう
あなたとなら 十字架も身につけましょう」
おずおずとしたメイの頬は赤らみ
その下には 愛に触れたやさしさ暖かさが輝き始める
それはまるで 蕾に受けた朝露の下で赤らみ
今花開かんとするバラのよう 80

さて 朝の祈りの時
人々は罪を悔いていた
サー・エルマーは谷に鋭く木霊する
アーサー王の角笛を聞いた

メイの美しい瞳から 四月の露のように 85
真珠の涙が流れ落ちた
メイとやさしい抱擁を交わし
兄エルマーは別れを告げた

雪のように真っ白な胸にかけていた
眩^{まばゆ}いばかりに輝き放つダイヤのついた十字架 90
メイはそれを 天へ祈りを捧げた後
ユリ色の手でエルマーの胴衣に留めた

そうして 五百人の優れた射手を率いて
エルマーは平原を進んでいった
雄々しいヨーマンたちを連れて 95
アーサー王の部隊と合流した

四万人ものサクソンの槍部隊が
切先^{きつさき}を光らせて 丘を下って来た
雄呼びとぶつかり合う鎧の音が
向こうの谷いっばいに響き渡った 100

老オファはオーディンの衣をまとい
その白髪^{みまげ}の戦いの神と見紛うばかり
かたやヘンギストは 血氣^{はげ}に逸るトール神さながら
騎馬隊の先頭を駆けた

激しい怒りで 戦いは白熱 105
武将たちは力一杯叫びたてる
エルマーの持つ無敵の長槍
その輝きは 戦場の遥か遠くからも見て取れる

若きヘンギストは エルマーの進軍を阻止せんと
戦場を走る稲妻のように駆けていった 110
すると エルマーの胴衣に留められている
あの忘れがたい十字架が目にはいった

不意を突かれて 恋する男の胸は大きくざわつき
その目からは赤熱の炎が飛んだ
これまでの熱き戦意も 115
今の想いに比べればつまらぬ望み

恋敵と思い込んだ敵の前に
ヘンギストは突風のごとき速さで詰め寄った
陽を受け輝くヘンギストの太刀はエルマーに打ち降ろされ
その兜飾りを鳴り響かせた 120

敵が退くと 若き王子は
怒りにまかせて追いかけた
裂けた兜を被ったままで震えながら
サー・エルマーは相手に槍を突き立てた

ヘンギストは頭^{こうべ}を垂れた 刺さった槍はゆっくり落ちた 125
その手を放れた手網は
真っ赤な血に染まっていた ヘンギストの堂々たる遺体は
息絶え 岸辺に横たわった

「わたしを運んでくれ」 エルマーは呼んだ
「この痛ましい眺めを前に 130
敵は泳ぎ去ってゆく だが ヘンギストの胴衣は
わたしの勝利の権利として求めたい」

サクソンは勇者ヘンギストの死を目撃し
誰もが怯えて逃げ去った
サー・エルマーの槍兵たちは 彼の城門へ 135
勇敢な武将を連れ帰った

「妹よ 傷口を洗っておくれ
このサクソンの矢を抜いておくれ
若武者ヘンギストの腕から放たれ うなりをあげて
危うくこの心臓を打ち抜くところ 140

だが 広間にはヘンギストの胴衣を揚げるのだ

後の世代のブリテン人は
今日の勝利を
その荘厳な宴席に飾るのだ」

ひどく震えながら メイはその胴衣を見た 145
「ああ マーリン様」 メイは大声で呼んだ
「あなたの予言は的中しました 恋人を殺されては
花嫁のわたしは息さえできません

ああ エルマー エルマー 戦いはもうやめて
恋人ヘンギストは死にました 150
ああ ヘンギスト あなたの腕は残酷だったわ
兄は血を流して死の間際」

メイはこう語ると バラ色の頬は青ざめ
温かい生気も失せて
木々を枯らす冬の突風に晒された 155
ユキノハナのように頭を垂れた
もがく命の別れ際に
メイはものうい目をあけた
「ヘンギスト 戻ってきて
殺されたわたしの恋人 戻ってきて 160

ああ ヘンギストはまだ生きている また笑いかけてくれている
優雅な物腰はいつも通り
さあ ゆきましょう 弓も矢も
この恋を邪魔しないところへ」

メイはこう言って 息絶えた サクソンの槍は 165
エルマーの胸から引き抜かれた
彼は三度妹の名を呼んで
三度呻いて 息絶えた

谷間に 老いたサンザシが
苔むした墓標を陰らせているところ 170
サー・エルマーと若きヘンギストの遺体は

槍兵たちの手で埋葬された

村の娘たちが 真っ白なローブを身にまとい

ため息をつき 涙を流して

ヘンギストの墓へと

175

メイの美しい遺体を運んでいった

明け方と日没に

まわりの木立の中から

キジバトが鳴き 死別を嘆く調べで

幸薄い二人の恋をうたっている

180

(中島久代訳)